

國學院大學學術情報リポジトリ

講演要旨「井上正鐵の三宅島における活動とその影響」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-04-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001543

講演要旨「井上正鐵の三宅島における活動とその影響」

日本文化研究所では、靈魂観・死生観に関するプロジェクトを次年度に向けて準備しており、三宅島での調査も予定している。そのため、2023年2月21日の第7回日本文化研究所研究会では共同研究員の荻原稔氏に、三宅島で活動した神道家・井上正鐵（1790～1849）についてご発表いただいた。他の日本文化研究所研究会についてはトピック8、同じ三宅島を対象とする学内研究会「島嶼部の伝統芸能をめぐる諸問題」についてはトピック6を参照されたい。

正鐵は、父親が関心を持っていた神道・国学のほか、医学、さらには食養・呼吸や念仏などの行法も学び、平田家や白川家とも関わりながら、1840年から神明社（現在の足立区梅田）を拠点に教化活動を行った。しかし、寺社奉行から2回にわたる取締を受け、1843年、三宅島に遠島となる。今回は、島で没するまでの5年半の活動が紹介された。

生まれ故郷・日本橋の近辺から流人船に乗り込んだ正鐵は、かねてより覚悟していた遠島を自身の「みそぎ」「はらひ」と位置づけ、新島や式根島を経て三宅島に到着した。以降、本土の門中に書簡で指導・運営体制を指示しながら、島でも門中を形成していくこととなる。とりわけ、1845年に雨乞いの祈祷を成功させたことで島人の尊敬を受け、そこから新居の造営、神代巻解説書や問答体文書の執筆を行うなど充実した日々を送るが、中風を発症し、1849年、60歳で死去した。

三宅島神着村の名主も務めた浅沼元右衛門による『三宅島年代見聞記』には、先述した雨乞いのほか、新しい蚕種の導入や「水溜」（貯

水池）の制作を行ったことが記されており、島の人々への影響を窺うことができる。

また、見聞記にも登場する梅辻規清は、江戸で烏伝神道を説いて取締を受け、八丈島へ流される途中の1847～48年、三宅島に滞在した人物だった。正鐵は、梅辻と面会し相互に研鑽するなかで「ふとまにの法」を伝授され、神代巻解説についてもアドバイスを得たことを書簡で述べている。

明治期における正鐵の門中は、教派神道のうち、特に「禊教」として知られる坂田家門下だけではなく、大成教などにもまたがっていた。大成教では『井上正鐵翁遺訓集』がまとめられるが、文筆家ではなかった正鐵が多くの書簡を残したのは、遠島の影響である。また、正鐵と梅辻の伝記を書いた岸本昌熾ら神習教二葉教会のように、本土における大成教と神習教の人的な重なりも興味深い。

現在の島には、伊ヶ谷地区の三宅島禊教会（単立）をはじめ、同教会境内の墓、1845年に詠句を揮毫した書、雨乞碑などの遺跡や『御用留』『三宅島年代見聞記』といった文書が、正鐵の痕跡として残されている。墓は伊ヶ谷だけではなく阿古地区にも分骨されていたものの、荻原氏が初めて三宅島で調査を行ってから数か月後の1983年10月、噴火により溶岩流に埋没してしまった。

発表後、共同研究員の三ツ松誠氏がコメンテーターを担当し、フィールドワークのポイント、正鐵における三宅島の位置づけ、幕府から取締を受けた他の宗教活動との比較について質問した。他にも質疑があり、今回は約30人が参加する盛会となった。（木村悠之介）